
いっそ恋だったら。

木下 葉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつそ恋だったら。

【Nコード】

N5986T

【作者名】

木下 葉子

【あらすじ】

ただただ兄妹が執着するだけのお話。恋愛感情なんてお互い欠片もないくせに、家族愛としてはちよつと異常な2人。

独特な理解されにくい感情なので、普通の恋愛ものが読みたい方にはお勧めできません。また、B L的な表現が多々ありますが、決してそれがメインではありません。近親相姦な表現が今後出てくる可能性が高いので、苦手な方は注意して下さい。作者自身がいまいちどのジャンルにあてはまるのかわかっていないので、とりあえず恋愛にいきます。

5月ももう半ばだというのに、まだ風が肌寒い。

高校生らしく短いが、教師たちに特別な注意をつけるほどではない程度の長さのスカートを下せばいいのかもしれないが、それは現役女子高生としてのプライドが許さない。

あたしは今日のように、不定期的だが意図的に早く帰宅する日を作る。

もう慣れたもので自宅で今頃何が行われているかもわかっている。

鍵のかかかっていない玄関を開け、二足の男物のスニーカーの存在を確認する。そのうちの大きくて、踵の潰れた方の靴を踏みつけ、家に入る。

いつもより足音を立てて階段を上がる。

一家4人が住むにしてはだいぶ大きすぎるこの家に、どすどすと言音が響く。

二階に上がり、すぐ右手にある自分の部屋のドアノブに手をかける。

隣の部屋からは、少し曇った男の人の声。

ああやはり、と自分の予想が確信へと変わったことに少しだけ安堵し、部屋に入る。

いつもよりゆっくりと制服を脱ぎ、皺にならないように丁寧にハ

ンガーにかける。

そして、本当に適当な部屋着を身に纏い、着替えを終わらせる。

少しくつろいだ後、部屋を出た。

隣の部屋のドアノブに手をかける。

さっき確認できた声は、もうすでにただそこに存在するだけの音として変わってしまった。

カチャリ、とドア独特の無機質な音がする。

それは、確信が事実へと変わる瞬間。

裸の青年が2人、ベッドの上で絡まりあっていた。

部屋の中に一切無駄なものがなく、非常に殺風景な印象を与えるためか、ベッドの上の肌色のかたまりの存在が際立っている。

「おかえり」

かたまりの、下に組み敷かれている方が、無表情にあたしに声をかける。

それとは対照的に、かたまりの上担当の方は、目を見開いて顔が真っ青になっているが。

「……ただいま」

あたしの方は、まあ妥当な言葉を返し、この光景をガン見する。
絶句とは何か違う、この沈黙。これ以上どんな言葉を続けていいのかわからない。

なんなんだ。

ごめん、続けて。とでも言えばいいのか。

結局適当な言葉は見つからなかったので、そのまま無言でドアを閉め、部屋から出る。

これからどうしようか。

そうだ。リビングでテレビを見よう。

そのまま階段を下りる。

先ほどの部屋から、ち、違う！とかいう声が聞こえてきたが気にしない。

そのあとのことは、よく覚えていない。

ただ寝つく直前に、ああ、また彼氏を兄に盗られてしまった。とだけ思った。

「知花^{ちか}あんた、山本と別れたの?!」
「うん」

あたしの前で彩り豊かなお弁当を食べながら、驚愕と呆れを半々くらいに感じさせる表情をしているのは友人の梓。背が高くてすらつとした美人だ。

いいな。ネギ入りの卵焼きおいしそう。頼んだらくれないかな。

知花というのはあたしの名前だ。

斎藤 知花。うん。わりと気に入ってる。

梓は倉本 梓。こっちもなかなかいい名前。

ちなみに山本くんはつい3日前まであたしの彼氏だった人。礼儀正しくて優しく、わりと気に入ってた。

「もうすぐ2ヶ月だったんでしょ？」

なんで別れちゃったのよ!」

「んー。性格の不一致?」

兄にとられたなんて言えるわけがない。

ああでも、いい人だったな。

シンと、あ、シンってのはあたしの兄だ。 斎藤 森太郎しんたろう。

シンと関係持ち始めたときもあたしにはれないように気をつかってたし。

なんだかんだで優しかったし。

山本くんの前の前の彼氏は最悪だった。

家に遊びに来たときは、シンがいないとわかるとみるからに落胆の表情を浮かべるし。

シンがいるときはあたしにはほとんど話しかけないで、シンの気を引くの**に**必死だし。

あたしと2人のときはシンの話しかしないし。

「でも高校入ってから最長記録じゃん！7人目だっけ？」

「中学入れたら9人」

「……もうあんたには山本しかいないと思ってたんだけどね！。

妹がこんなところ彼氏変えてたら、シンさんも心配するよ」

「いやそれはありえない」

梓はシンのファン。年が2つ上で、去年まで同じ高校だったからあたしの学年の子はみんなシンのこと知ってる。

シンは目立った。良くも悪くも。

顔立ちが信じられないくらい綺麗だった。

兄妹なのに全然似てなかった。

似てるのは白い肌とちょっとふわふわした髪質くらい。

シンは全体的に色素が薄くてきれい。

あたしは目も髪も真っ黒。肩よりちょっと長いくらいの髪は毎朝言うことを聞いてくれなくて、まとまりがない。

シンのはきれいにまとまって、普通にパーマをかけてるみたいに見える。ずるい。

シンはいつでもどこか色気があった。むんむんだ。

老若男女問わず、時には教師だってシンを一目見ただけで夢中になった。

歩く麻薬みたいな人だ。

あたしは控えめに言うつとふつつ。

ひいきめに見て、ちょっと可愛いかな？つてくらい。

でも（シンに似て）肌がきれいなのと声が可愛いせいで、寄ってくる男子には困らなかった。

まあ1人残らず取られちゃったわけだけど。

「……でもあんた、ほんと元彼たちになにしてんの？
あんたと別れたあと、誰も新しい彼女作ったとか聞かないんだ
けど」

梓が眉間に皺をよせ、訝しそうな目つきをする。
美人は何をやっても様になる。

「なにもしてないって。ほんとに。
あたしと付き合って、女って生き物に絶望したんじゃない？
あたしけっこうずばらでいいかげんだし」

嘘は言っていない。決して。

あたしと正式に別れたあとみんな喜んでシンのところに行くんだ
けど、そのころにはもうシンのほうは興味を失ってるらしい。
つまりあたしと別れたあとはもう用なし。

まあそれでもみんなけっこうしつこく付きまとってるけどね。
よく元彼がシンを口説きに家に来たりするし。

あたしは気にしていないけど。

うーん、と梓が納得のいかないように唸る。

「ありがと、梓」

あたしが少し笑ってお礼を言うと梓は、もうこれ以上は何も言わ

ない、とばかりに肩をすくめた。

そしてあたしが、最近お気に入りの苺オレをストローから吸っていたら廊下から教室へと声がかかった。

「斎藤さん、ちょっといい？」

このあまり控えめな声の主は、隣のクラスの草食系っぽい男子。名前は知らない。

あ、けっこう顔整ってる。

「あの、ちょっと話があるから、ちょっと中庭まで来てくれる？」

この人『ちょっと』が多いな。

でも顔を赤くして目も合わせられない姿が、初々しくて好印象。

「いいよ。ごめん梓、ちょっと行ってくる」

少し急いで紙パックの中身の残りを飲み干して、席を立つ。

後ろで梓がため息をつくのがわかった。

10人目の犠牲者がでるのか、と思うと少しだけ暗い気分になった。

記念すべき10人目の彼氏は杉くんというらしい。笑ったときに眼鏡の奥の細まる瞳が、なんか可愛い。

初心そうだと思っていたが、どうも呼び出しのときは緊張していただけらしい。慣れたら結構気さくにしゃべる人だ。

女子にも男子にもわりと人気があるらしいが、全然知らなかった。まあ興味ないし。そもそもあたしも梓も女子に嫌われてるから、そういう情報とか全然入ってこないし。

ああ、嫌われてる理由は簡単。梓は美人なうえ他人に関わったり媚びたりしないから気取ってる、とか思われる。あたしは単にたいして美人でもないくせにもてるから。

女の嫉妬は見苦しい。

まあ、あたしはちよっとくらい嫉妬したほうがいいのかもしれないけど。

付き合い始めて3日目。学校帰りに杉くんが家まで送ってくれた。でも帰り道反対方向らしいから、申し訳ないよとあたしが言ってみると、俺が斎藤さんと一緒にいたいただけだから、と笑って返された。なるほど。人気があるわけだ。

家の前に到着したので、上がってく?と聞いてみた。

でも杉くんは家の大きさに圧倒されたようで、やんわりと上手に断られた。

お互いにはいはい、といった後にあたしは玄関のドアを開く。

「おかえり」

「…ただいま」

目の前に色気の塊が立っていた。

仲はそんなに良くないが、挨拶を小さいころに両親にしっかり叩き込まれたため、最低限の会話くらいはする。

閉じかけのドアから外を見ると、もう杉くんは当然ながら後ろを向いていた。

「…新しい男？」

シンはただ無表情に問う。

「まあ、そうなのかな」

少しぼかしてあたしが答える。

シンは、ふうん、と靴を履きながら気の抜けた返事をした。

そういえばここ数年、お互い2人でいるときに感情出すことなんてなかったな。

普通の兄妹はどうなんだろ。そもそもあたし達ってやっぱり普通じゃないのかな。

「バイト？」

「うん。あ、夕飯いらない」

「わかった」

両親は基本家にいない。仕事がすごく忙しいみたいだ。

母が客観的にみてすごく大きな会社の社長をしている。父はそのサポート役みたいな仕事らしい。

まあどうせあたしは後継ぎじゃないから、詳しく知らないけど。

「いってきます」

「いってらっしゃい」

シンがドアを開ける。さすがにもう杉くんは近くにはいないだろう。

無駄に広い玄関に、1人残される。

そういえば、初めての彼氏がシンとキスしてたのはこの玄関だったな、とぼんやり思い出した。

3 (後書き)

今回いつもより短めです。書きたかったところまで書くといつあ
げられるかわからなかったのだ…。(汗)
とりあえずキリのいいところまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986t/>

いっそ恋だったら。

2011年10月9日03時33分発行